

令和6年度事業報告

事業の概要 第二部

II. 中学校高等学校の部……………	P. 3
初等学校の部……………	P.10
幼稚園の部……………	P.20
III. 教育研究所の部……………	P.27
法人事務局の部……………	P.30



2025 年 6 月
学校法人成城学園

II .

中学校高等学校の部

初等学校の部

幼稚園の部

成城学園中学校高等学校

(I) 教育活動

A. 国際教育

《中期計画の目標》

「異なる文化や価値観」を理解しそれに共感すると同時に、「自国の文化や価値観」を伝えていくこともできる知識・教養を身につけさせる教育プログラムを、様々な教科の横断的な学びから発展させていく。その際、生徒が視野を広げられるような体験を有機的に繋ぎながら積み重ね、それらの中で、国際的なコミュニケーションを可能にするための言語運用能力の向上をはかる。特に英語については、英語検定試験等を活用し各学年で設定した到達目標に向けた学習活動を展開する。

《中期計画の取組》

- ①短期留学、長期留学、留学生との交流などの国際交流プログラムの充実
- ②歴史(日本史、世界史)、経済、地理、環境教育、人権教育の視点を通じて他者理解を学ぶ
- ③種々の検定試験等の有効活用、e-learning 教材の活用など、語学教育の深化
- ④国際教育(海外の大学進学)を意識した進路指導の充実

《事業計画》

- ・現行ならびに新規の海外研修プログラムの充実をはかる。
- ・カリキュラムマネジメント委員会を中心として、現在行われている他者理解に関する教育活動の状況を把握し、個々の実践を探究活動へと結びつけられるような場を設けていく。
- ・引き続き、実用英語検定試験への取り組み等を通して、語学教育の深化をはかる。
- ・海外の大学進学に関する進路指導についての研究を深める。
- ・グローバルコンピテンスプログラム(GCP)の中で、自分自身を見つめることをスタートに、学校や家族、地域社会、世界に視点を向けていく姿勢を育成し、自国だけでなく国際的な事柄への興味を高める。

《事業報告》

- ・高校生を対象とした海外研修プログラムとして、カナダ短期留学、ヨーロッパ訪問の他に、インド、バリ島、ベトナムなどの新規プログラムを実施し、他校との交流、現地校との交流に加えて、環境や貧困などの地球規模の問題に関してより深く考察する機会を得るといった、国際交流に関する企画に新たな幅を持たせることができた。
- ・中学3年生対象のオーストラリア研修旅行は、111名の参加となり、これまでよりも規模を拡大することができた。
- ・6月に行われたマクダナ校国際交流担当教員の訪問を受けて、今後の交流プログラムについての新たな調整を行い、3月に短期留学プログラムを実施することができた。
- ・英語検定試験を通して、各生徒の技能を高める努力が続けてきたが、今年度3年生卒業時において、初めて7割超の生徒がCEFR-B1レベルを達成することができた。
- ・来年度から開始する、GTEC(Global Test of English Communication)の高校生への導入について具体的な実施計画を作成し、6月の実施に向けての準備を進めた。
- ・中学1年生から高校1年生を対象とするグローバルコンピテンスプログラム(GCP)については、昨年度までの実績に加えて、今年度もより充実した授業実践を重ねることができ、より定着をはかることができた。

B. 理数系教育

《中期計画の目標》

生徒が課題を発見・分析・解決できる、高い問題解決能力を育成するために、これまでの授業・学校行事を、「探究」の視点から再構築していく。特に、自然観察や科学実験、データ分析、モデル化等、より適切なアセスメントを行う体制をつくり、生徒の理解力に応じた学習支援体制を構築していく。

《中期計画の取組》

- ①各学年の学校行事を展開する中で、新たな視点を取り入れた課題解決型の教育活動(PBL)
- ②「サイエンス教室」の継続的な実施など、理数系への興味関心を深めるためのプログラムの開発
- ③理科実験室の活用、基礎教育(定着)の充実、ICT 機器を活用した発問や対話を重視した学習活動、デジタル・シティズンシップ教育の展開など、日常的な学習活動において、論理的な思考力を高める施策

《事業計画》

- ・各学年の学校行事(中学校:海の学校、山の学校、高等学校:課外教室)の中に、数学や理科の視点を取り入れた課題を設定していくための調査(実践研究)を行っていく。
- ・これまでの経験を踏まえ、サイエンス教室など、理数系への興味を広げ、深めるためのプログラムを実施していく。
- ・これまで実施してきたデジタル・シティズンシップに関する実践を重ね、より日常的な活動に結びつけた実践を行っていく。
- ・新高1学年から導入される、ノートPCの活用についての実践的な研究を行う。

《事業報告》

- ・6月18日にサイエンス教室(「ミクロの世界を覗く」 計測基盤技術研究所 坂入実先生 日立ハイテク研究所 寺田大平先生)を実施することができた。参加生徒は、遠隔操作で電子顕微鏡を扱うなどの体験をすることができた。これに加えて、2月6日には、本校教員によるサイエンス教室(「化石の観察」)も実施することができ、参加生徒は、木の葉や昆虫の化石を見つけることができる貴重な体験をすることができた。
- ・プログラミング教室を4月以降定期的に実施することができた。昨年度に比べて多くの生徒が、プログラミングに関する実践的な体験を複数回、行うことができた。また、来年度以降に、新たな展開(ロボット操作)を実施していけるよう準備した。
- ・ペーパープログラミングコンテストで、高校3年生を含むチームが全国2位となるなど、理数系教育を通じた社会課題への取り組みが高い評価を得た。
- ・今年度の高校1年生から導入されたノートPCについては、その活用が定着し、様々な場面で実践的な取り組みが進んだ。
- ・デジタル・シティズンシップに関する授業実践は、中学生、高校生、それぞれを対象に行われ、より日常的な活動として展開することができた。

C. 情操・教養教育

《中期計画の目標》

学校行事や部活動等を中心とした、様々な表現活動の場を、従来の枠にとらわれずに広げ充実させていく。

《中期計画の取組》

- ①国際教育の枠組みの中で多様性理解に繋がる情操・教養活動の展開
- ②日本語表現力を磨く活動の充実
- ③芸術系科目を基礎とした、共感を大切に活動の充実
- ④学校行事を通じた、異学年の交流とリーダーシップ、フォロアーシップを高める活動の深化
- ⑤保護者と共に考えるデジタル・シティズンシップ教育の拡充

《事業計画》

- ・学校行事全体を統括的に見直し、それぞれの位置づけを考える場（委員会等）を設け、行事間の結びつきや、異学年間の交流などについて総合的に検討していく。
- ・これまで行われてきた読書指導、作文指導、メディア委員会の活動などの充実をはかり、生徒の活躍の場を設定していく。同時に新たな表現活動の場を模索していく。
- ・グローバルコンピテンスプログラム（GCP）を、継続的に実施していく中で、多様性に関する理解を深める表現活動の場を設けていく。
- ・芸術系科目の成果を発表する場としての文化祭や、多様な部活動を中心に、個々の個性を伸ばしていくための「しかけ」を充実させていく。
- ・保護者とともに考え意見交換する場を設けながら、広く他者を思いやる気持ちの育成を目指し、情操教育の幅を広げていく。

《事業報告》

- ・今年度より、設置した「行事統括委員会」において、各行事間の有機的な結びつき、ならびに安全配慮などについてのきめ細やかな話し合いを行い、それぞれにおいて、より適切な運営が行えるような基盤をつくることができた。
- ・様々な工夫（ゲーム形式の読書推進企画）など、読書指導に関する地道な取り組みが見られた。
- ・例年どおり、飛翔祭、文化祭などでは、とくに、異学年の交流が深まるような活動を展開することができた。飛翔祭は“Seijo Quest”というテーマのもと生徒たちの行動力が発揮された。文化祭では、「美好」をテーマとした生徒たちの自主的な活動や運営がなされた。それぞれにおいて、熱心に活動する姿を見られ、来場者の満足度も高かった。
- ・6月の文連週間ならびに11月の文化祭では、文化部の、展示、発表会など日頃の成果発表が行われ、それぞれの力が発揮された。また、3月に実施された中学3年生特別授業展でも、ユニークな作品や音楽発表の様子（録画）が展示され、それぞれの成果発表が充実したものとなっていた。
- ・1月に実施された、父母の会との意見交換会を通して、生徒を中心に据えた学校生活における諸問題について共に考えることができた。また、昨年度出された課題等に対しての具体的な展開についても報告することができ、情操教育の基礎となる学校生活について貴重な意見交換を行うことができた。

D. その他の重点分野

《中期計画の目標》

本学園独自の「SAIL(SEIJO Academic Interactive Learning)」プログラムを2024年度より本格的に起動させ、異年齢により構成されたコミュニティの中でさまざまな思考法を学び、協働しながら課題解決する経験を重ねていく。さらに、経験による硬直化を防ぎつつ「未知」に挑むスキル(アンラーニング)を持ち成長しつづける生徒が増え、2030年には自主的な活動として多くの「探究するコミュニティ」が学園内に創られるようにする。

《中期計画の取組》

①大学との連携

ロジカルシンキングやデザイン思考など、課題解決の方法としての思考法について学ぶ。この学習体験により、体系だった学びで得た知識や思考力が成城大学または他大学での研究活動、さらにその後の人生におけるアンラーニングにつながることを強く意識させ、中高大の学びのロードマップを描けるようにする。この学習経験によって得たことをアウトプットし、次なる課題を創出する。

②社会に目を向けた活動

さまざまな企業、団体での取り組みにふれる機会を持つ。その経験により社会に出てからの課題解決のイメージをつかみ、必要なスキルは何かを考える。また、多様な文化や背景を持つ人たちも含め、他者の視点を理解し、共感する力を育む。この学習経験によって得たことをアウトプットし、個人と社会との関係について次なる課題を創出する。

③学びの原点の探究

「①②によって得た力を成城学園という学びの場にどう還元していくか」という問いのもと、協働しながら課題解決に向けたアイデア創発を行い、このプログラムを終了した後も自主的に探究するチームが創られるよう学習環境を調える。また、幼稚園や初等学校との交流を通して「学びの原点とは何か」を考える機会を持つ。

《事業計画》

企業、団体、大学との連携を深め、一人一人の生徒が他者の視点を理解し自らの「課題」を発見していくためのプログラムを構築していく。また、外部団体が主催するコンテストなどにも積極的に参加し、成城学園中高で学んだことが外部の人々からどのような評価を受けるのか、フィードバックを受ける機会を設ける。さらに、そのような外部評価から今後のSAILで培うべき力や成城学園中高における課題の見える化に努める。一方、SAIL以外の授業や取り組みとの連携（横のつながり）も加味しながら、生徒が実社会で生き抜く力を育成していく。

《事業報告》

- ・今年度、企画内容について見直しを行ったSAILについては、「社会にふれる」「社会を知る」「社会に関わる」といった大きな3つのテーマのもとに、NTTe-City Labo、テレビ朝日、東京証券取引所、共同通信社・外務省・日本銀行への訪問といった企画などを実施することができた。
- ・「思考・発想ワークショップ」という形で、複数回、企画を実施することができた。内容は、昨年度と同様、有意義なものとなったが、広報活動も含めて、生徒の参加をどのように促していくかという点で、今後課題が残った。
- ・データ活用の方法を理解することを目的に、NTTe-City Laboにて「データサイエンスワークショップ」を開催した。ワークショップに参加した広尾学園の生徒とともにExcelを活用しながら、社会課題解決に向けてのアイデアを出し、NTTの方々から評価を受けた。

(Ⅱ) 研究活動

《中期計画の目標》

日々の授業の中で、生徒の自主性や創造性を引き出すような授業運営・評価方法についての多様な情報を集め、それらについて研究・実践するための研修会・研究会を実施していく。とくに、教員同士が情報交換やアイデアの共有を行える場を設け、教育の質を向上させる取り組みを進めていく。さらに、社会との連携を強め、生徒の発想の柔軟性を高めるための支援体制を整えていく。さらに、教員の仕事について、効率化、環境整備等についても、リサーチを進めていく。

《中期計画の取組》

- ①教育効果をより高めるための ICT 機器利用に関する研究
- ②学び方、学ばせ方に関する教員間の学び合いの充実
- ③多様な観点からの評価方法をとり入れていくための継続的な研究
- ④多様な評価方法に対応できる、評価システム、教務処理システム(PC 環境)に関する研究
- ⑤課外教室等の学校行事について、「探究」的な活動を高めるための研究
- ⑥豊かな経験をもつ社会人との出会いを演出し、生徒との対話の機会を増やしていくための活動
- ⑦働き方改革を見据えた効率的で効果的な教材作成に関する研究
- ⑧将来的な部活動のあり方に関して考えていくための調査活動

《事業計画》

- ・パフォーマンス評価のあり方など、評価に関する検討を継続的にを行い、教科間の特性なども含めた多様な観点から、評価全般に関する問題意識を高めていく。
- ・ICT機器の利活用を中心として、学び方、学ばせ方についての教員間の学び合いの場を設けていく。
- ・探究という視点から、(高等学校) 課外教室の位置づけを見直し、新しいものへの移行を目指し、内容の充実をはかる。
- ・キャリアガイダンス等、社会人との出会いの場を設け、個々の生徒が、それぞれの特性に気づき、将来について考えていけるような企画を設定する。
- ・将来的な部活動のあり方について考え、部活動指導員制度の拡充など、持続可能な方策について検討していく。

《事業報告》

- ・今年度より将来構想委員会を立ち上げ、学校行事(とくに宿泊行事)の位置づけ(とくに中3研修旅行)についての話し合いを行った。さらに、カリキュラム検討委員会において、高等学校課外教室に関する具体的な改善策についての検討を行うことができた。来年度以降の企画について、「探究的な」扱いをより充実できるよう検討を重ねた。
- ・ゼミナール(探究学習)については、昨年度の2年生対象のものの充実をはかり、かつ、今年度は高学3年生対象のゼミナールも開始し、より深い探究学習が行われるようになった。とくに、2年生では、昨年度同様、ユニークで柔軟な発想のもと探究活動が進み、情報機器を巧みに活用した見事な発表が行われた。
- ・中高ともにキャリアガイダンスや進路ガイダンスを系統的に行うことができた。また、中3のキャリアガイダンスでは保護者の参加を可とし、キャリア教育を多面的に進めることができた。
- ・部活動の運営については、部活動指導員の導入について継続して検討をし、具体的な取り組みを行った。

(Ⅲ) 社会連携活動

《中期計画の目標》

地域との連携を深めていくため、これまで続けてきた各種連携活動の内容を深めていく。さらに、中高協会第8支部、もしくは、5学園との交流を通して、多くの私立学校、さらに公立学校との交流を拡充していく。

《中期計画の取組》

- ①BLS・水辺の安全講習を通した「いのちの教育」の普及活動など、学内スキルを活用した活動の充実
- ②学内施設を利用した地域・他校との交流
- ③学内自然環境(100年の森、杉の森)の活用を通じた、地域との交流活動の展開
- ④ボランティア活動等の場を広げ、人とのふれ合いを大切にする活動の展開

《事業計画》

- ・学内施設の活用など、地域（世田谷区、狛江市）の中学校・高等学校との連携活動を深めていく。
- ・広く社会と学校の結びつきを実感できるような、多様な活動・プログラムを実施していく。

《事業報告》

- ・世田谷区と、環境保全（グリーンインフラ等）に関する話し合いを持つことができた。来年度以降、生徒が参加できる形についての話し合いを行った。
- ・世田谷区教育総合センターとの連携を深め、区立中学の進路指導に関する企画（チャレンジ教室）への参加など、交流を深めることができた。
- ・1月実施の課外教室「学校に泊まろう」において、防災意識を高めるために、世田谷区との連携した企画を行うことができた。
- ・中高協会第8支部の活動を中心として、私学助成に関する取り組みなどを他校と連携して行った。
- ・9月に本校を会場とした5学園教育懇談会の場において、諸課題に関する貴重な情報交換を行うことができた。

(Ⅳ) 教育環境整備

《中期計画の目標》

多様なバックグラウンドを持つ生徒が協力し円滑な協働作業ができるよう、グループ学習スペース、発表スペースの充実を図り、ICT機器等のコラボレーションツールを活用できるようにしていく。また、災害時の備えを含め、生徒の安全や健康への配慮を広い視点で考え改善点を見出していく。

《中期計画の取組》

- ①コリドースペース、カフェテリア等の活用について、生徒の意見をとり入れつつ検討
- ②現「PC 教室」の新展開を考えていくための情報収集
- ③生徒のケガ、体調管理等に関連する学校環境・設備の影響についての調査と改善
- ④科学実験を中心とした、生徒の探究的な取り組みを発展させるための施設設備の拡充
- ⑤芸術系科目を通した表現力を高めるため活動を支える施設・設備の在り方についての研究
- ⑥技術・家庭科を中心に「作る」ことを豊かにする施設の在り方についての研究

《事業計画》

- ・地下1階コリドースペース、カフェテリア等の活用について、生徒の意見を聞きながら、活用を進めていく。
- ・現PC教室の新しい利用について、環境整備に関する具体案をつくる。
- ・災害時への対応、生徒のケガの未然防止策など、安全に関する施設設備等の見直しをはかる。
- ・理科、芸術、技術・家庭といった教科の学習活動を支える施設設備について、探究的な学習との関連をもとに研究していく。

《事業報告》

- ・コリドースペース、カフェテリアに加えて、2階ブリッジにベンチを設置し、生徒の新たな交流の場を設けることができた。また、来年度に向けて、上層階における自動販売機の設置について検討を重ねた。
- ・ケガ防止については、とくに飛翔祭（体育祭）における安全対策など、これまでに行われてきた種目等の見直しを細かく行い、それぞれにおいて改善することができた。
- ・現PC教室については、可動式の机・椅子を教室内に入れたため、「情報」での利用以外に「ゼミナール」での利用も多く見られた。今後、より幅広い活動に対応できるようにするため、新規購入すべき機材などについて計画を立てた。
- ・理科の新規モニターの購入など、施設設備に関しての、一部、改善をはかることができた。

成城学園初等学校

(I) 教育活動

A. 国際教育

《中期計画の目標》

- 1) 英語の聞く・話す・読む・書くの4技能を統合的に活用しながら、積極的にコミュニケーションをはかれる子どもを育成する。
- 2) 世界の多様な価値観の学びを通じて、異質なモノ・コトの存在を認める姿勢を育む。

《中期計画の取組》

- ① 外部試験を活用した、英語の能力の育成
- ② ICTを活用した英語授業、家庭学習の更なる充実
- ③ ホームステイプログラムの充実・拡充
- ④ 外国人講師卒の拡充

《事業計画》

- (1) 4、5、6年生で英検4級未取得者に4級または5級を受検させる。6年生での英検4級取得率80%を達成する。
- (2) 3年生以上児童1人1台iPadの4年目。普段の授業と家庭学習で英語力強化に効果的なMONOXERをはじめ各種アプリを活用する。全学年の普段の授業でICT機器を活用し学習効果の向上を図るとともに、より効果的な活用の仕方（適当ではない場合を明らかにする）を探る。
- (3) 1、2年生:1h/週 3、4年生:2h/週 5、6年生:3h/週
ヒューマンアカデミー社からの原案を基に作成した高学年オリジナルカリキュラムを実践しつつ、より初等学校に適したカリキュラムに改訂していく。
- (4) 原則、日本人英語教員と外国人講師のチームティーチングによるオールイングリッシュ授業（全クラス・全授業）。
 - ・ 授業中の母語の有効活用（イングリッシュリッチの考え）。
 - ・ 英国オックスフォード大学出版のテキストブックの使用。
 - ・ 単元小テスト・パフォーマンステストの実施。
 - ・ サイドリーダー等、副教材の活用。
 - ・ ワードリストの活用。
 - ・ フォニックスの活用。
- (5) 学習計画の提示、児童の振り返りの実施。思考力・判断力・表現力の向上を目指し、生きた言語使用場面を作り出す。対話的で探究的な深い学びの実現を図る。教科横断型授業の実施（社会・理科・美術等のトピックについて、児童が既に持っている知識や技能を活用して英語学習を深める）。
- (6) コロナ禍で検討中であったプログラムを実施に向けて始動させ、年度内実施を目指す。互いに語学力を伸ばす機会とし、多文化理解及び国際交流の場の提供を図る。（成城大学の留学生との交流。英語を母国語としない海外の児童の交流）。
- (7) 「オーストラリア・ホームステイの旅」の8月実施。（予定）

《事業報告》

- (1) 目標達成に向け、英検対策ソフトのMONOXERを活用したり、英検形式の定期テストを各学年実施した。家庭学習では、進捗状況をモニタリングし、児童の学習習慣を確立させる取り組みを行った。

(2.1) iPadアプリ MONOXERについて

- ・3年次ではiPadアプリ『MONOXER』を活用し、1-2年生で習得した単語を反復練習することで、基礎的・基本的な語彙を長期的に定着させる取り組みを行った。
- ・4年次～6年次では、英検の合格に向けた対策として英検MONOXERを実施。20日間の単語学習を行った後に、MONOXER上で小テストを実施した。「20日間学習と小テスト」のサイクルを繰り返すことで、英検に出てくる単語の定着を計った。

(2.2) 各種アプリの活用について

- ・3年生以上ではiPadを用いた成果物発表（プレゼンテーションや動画撮影など）を積極的に実施した。Google Classroomを活用して、各児童の学習成果をデジタルポートフォリオとして記録・共有し、振り返りや自己評価の場を設けたことにより、児童自身が学びの過程を見直し、次のステップに向けた目標設定を行う姿勢を育成することができた。
- ・音声付きオンラインライブラリーのアプリ(epic!)を使用し、長期休みにサイドリーダーを課題図書として実施。4年生以上には「サイドリーダー確認テスト」を休み明けの夏と冬に計2回実施した。
- ・その他、ゲーム感覚で楽しく知識・技能を習得することができるソフト(Kahoot!、Quizizz、Blooket、Bamboozle、Wordwallなど)を使用し、日々の英語学習に役立てた。

(3) ヒューマンアカデミー社のカリキュラムをベースに、4、5、6年生においては、基礎・基本となる語彙や表現力を活用し、思考力・判断力・表現力が育成できるようになるプロジェクト型学習を実施した。プロジェクト型学習をより効果的にするための研究も現在進めている（参考：2023年度教育研究所研究助成『児童が英語に自信を持てるようになるプログラム型・プロジェクト型学習融合カリキュラム作成と検証』（梶山&今井、2023）、2024年度研究助成『プログラム・プロジェクト型学習融合カリキュラムが与える小学校英語学習者への情意的変化』（今井&梶山、2024））。今年度は、3年生においても、プロジェクト型学習を取り入れるための検証を進めた。

(4) 4技能を包括的に育成するため、継続的にティームティーチングを導入。基本はオールイングリッシュのスタンスではあるが、母語を効果的に活用することで、授業の目標を明確にし、学習者の不安を軽減することができた。

(5) 思考力・判断力・表現力を育成するために、4年生以上に対しては積極的に「プロジェクト型学習」を展開した。プロジェクト型学習に関してはなるべく本校ならではのトピック（例：恐竜ミュージアムで恐竜発表をしよう<教科横断>/ 台湾の小学生のために学校紹介をしよう / 美術の時間に作成した作品を紹介しよう等）になるよう実施した。

(6) 6月にアメリカより研修生4名が本校に来校。オーストラリア・ホームステイの旅に所属する21名の児童が代表として学校案内を実施した。また、2025年3月には台湾の「ビクトリアスクール」より100名近い小学6年生が来校。オーストラリア・ホームステイの旅に参加した児童を中心にスクールバディ制度を導入し、児童同士の異文化理解や英語でのコミュニケーションスキルの向上を図った。

(7) 2024年8月24日(土)から9月1日(日)まで、オーストラリア国ブリスベン市内にてホームステイを実施した。参加児童は5・6年生希望者の21名だった。ステイ先はEducation Queensland International認定の民間宅だった。学校はバンヨーにあるEarnshaw State Collegeに通った。

(8) 2025年3月10日、11日 台湾ヴィクトリア小学校の体験入学を受け入れた。まず、全校で歓迎セレモニーを行い、その後、授業に参加。昼食を共にして、交流を図った。

B. 理数系教育

《中期計画の目標》

- 1)(数学)初等学校独自の領域(仮名:「比例的推論」)を設立する。
- 2)(理科)大単元構想に基づき、単元同士を系統的に結び付けるカリキュラム改革を実行する。

《中期計画の取組》

- ①(数学)比例的推論関係の研究授業など、新領域の構築に向けた研究と実践
- ②(理科)エネルギー領域に関する大単元を構想する
- ③(理科)恐竜・化石ギャラリーを活用した、異学年交流や英語科との教科間連携による授業の実践
- ④(理科)FOSS を活用した実践研究

《事業計画》

- (1)教育改造研究会・授業研究会の実施による実践の改善とカリキュラムの見直し。
- (2)日々進歩していく技術に対応するため、教師自身が研修会に参加したり、講師を招いての研究会・研修会を開催したりする。
- (3)デジタル・シティズンシップ教育（学園情報一貫教育検討推進委員会で実現に向けてスタート）の拡充。
- (4)教科横断的な適時性を考慮したカリキュラムの可能性の検討・試行。
- (5)校外学習等の充実（夏の学校、スキー学校、クラスデー、特別校外学習等）。
- (6)恐竜・化石ギャラリーの有効活用等、理数系教育の充実を図る。

《事業報告》

- (1)2024年11月29日(金)、30日(土)の2日間で教育改造研究会を実施した。
- (2)日々進歩していく技術に対応するため、講師を招いて以下のような研究会・研修会を開催した。
 - ・毎学期（6月・9月・2月）「校内研究会」を開催
 - ・「第42回 教育改造研究会」11月29日・30日に開催
 - ・年間を通じて全教員対象の「教科部主催の会（体育の実技講習や学校づくりをテーマとした話し合い）、「研究部主催の会」（初等学校の授業への理解を深めるべく『劇』や『音楽』の授業体験）の実施
 - ・教科研究部主催の「対外向け・自主研究会」の開催（国語・数学・理科・社会・英語）
 また、年間を通じ、教職員個人で「学外の研修会」に参加した。研修報告については、全職員に共有・報告した。
- (3)デジタル・シティズンシップ（DC）教育の拡充について
昨年度は5年生以上が対象であった親子学習会を2回に分け中学年・高学年の2回開催として実施した。また、9月の第49回幼・初・中高合同研究会では、6本のDC授業を新規に開発し実践を行った。
- (4)日々の授業実践にて研究を継続して行った。
- (5)4～6年の夏の学校、3年秋の学校無事終了。2月に、4～6年生のスキー学校も大過なく終了した。
- (6)恐竜・化石ギャラリーの有効活用・理科系教育の充実を図った。

C. 情操・教養教育

《中期計画の目標》

- 1) 出会いやかかわりを大切に、言葉や文字、歌や身体等、様々な表現方法で、思いを伝える経験を通じて、豊かな表現力を育む。
- 2) 子どもたちの言葉や身体を生かし、新たな創造活動を基盤とする授業の実施。

《中期計画の取組》

- ①(劇)子どもたちの「劇づくり」を基にする新カリキュラムの構築
- ②(遊散)遊び・散歩科の実践研究の充実

《事業計画》

- (1) カリキュラムの見直し及び改訂、カリキュラムの実施。(美術・音楽・体育・舞踊・劇・文学)に関連して
 - ・(美術) ICT機器を活用してウェブ上でのポートフォリオ作成や、機器を使って思考を可視化する取り組みを行う。それらを活用し、個人内評価へつなげる。
 - ・(音楽) コロナ禍や行事見直しでイレギュラーな形が続いていた、子どもたちの大切な表現鑑賞機会である「音楽の会」スタイルを数年計画で取り戻していく。
 - ・(舞踊) 子どもたちの活動する位置を固定したり、密にならないように工夫したりしながら、自由創作やグループワークを取り戻してきた。年度末には、舞踊室や講堂による舞踊発表会を行い、授業による成果発表を実施する。
 - ・(体育) 個々の成長を見守りながら、自身で設定した目標に向かって努力し積み重ねて取り組んでいける環境を設定する。達成感を得ることによる更なる成長を期待する。
 - ・(文学) 多様な作品を鑑賞し、感じたことを表現することができる。従来の生活作文に加え、創作活動も視野に入れて研究を進めていく。
 - ・(劇) 児童が「劇を創る」ことを軸とした、第3次カリキュラム改訂を行う。これに伴い、独自教材「げきのほん」についてもカリキュラムに沿った内容へ改める。
- (2) 感染防止対策を講じて、音楽の会、劇の会を継続実施する。行事終了後、児童の「振り返り」及び教員の反省等から更なる内容の充実を図る。
- (3) 児童の創作・表現活動について研究する。
- (4) 「初等学校独自」に関連して
 - ・コロナ禍を経た『つながり』の在り方を研究する。
「つくる」活動を中核にコトづくりを大事にした授業をカリキュラムに取り入れる(美術)
※つながりや教科横断に関わる内容ということです。
 - ・命を守る生命教育の一環としてのライフセービング部の活動継続。音楽系課外クラブの活動充実に向け取り組む。
 教室内外、学校・学園内外での様々な体験からの「学び」と創造力を育むクラスデーの更なる充実。

《事業報告》

- (1) 美術・音楽・体育・舞踊・劇・文学で、カリキュラムの見直し及び改訂、カリキュラムの実施状況について
(美術) ウェブクラウド(スクールタクト)を利用しウェブ上でのポートフォリオ作成をし、思考を可視化すると共に振り返り活動も行い、個人内評価・形成的評価も行った。

(音楽) 今年度、12月音楽の会がコロナ禍前の通常スタイルである、3年生(クラス発表)、6年生(クラス合奏)、その他の学年(学年発表)、全校合唱伴奏(器楽伴奏)、合唱部ブラスバンド部、教職員合唱の発表を実施した。

(体育) 合同体育では、1～6年生6人組のユニットで協力する種目「ユニット対抗綱引き」を初めて実施した。水泳授業では、短縮期間の放課後に水泳が苦手な児童を対象とした特別水泳訓練を実施した。3月の放課後、持久走への興味・関心を高めるため、希望者を対象に「持久走記録会」を実施した。

(劇) 5年ぶりとなる対外発表「第28回 成城・学校劇の会」を2学期に実施した。発表作は、4年生有志による児童創作劇「扉をあけると」、3・5・6年生有志による子どものためのミュージカル「Save The Earth」の2作品である。当日は一般の参観者、教育・演劇分野の関係者約500名が来場した。上演に向けた指導を通して、劇指導の在り方や現状の課題についての認識を共有することができた。

(3) (劇) 旧同人の編んだ研究書や叢書を紐解きながら、児童の創作について、当時の劇科では、どのような指導が行われていたのかを調査した。また、児童の表現については「観る／観られる」という関係性に焦点を置きながら、特に「観る」立場の子どもたちを、活動へ適切に関わらせるための手立てや方略について検討を進めた。

(美術) 絵のへや・工芸のへやに設置したプロジェクターを活用し、鑑賞教育を充実させた。今後、彫塑のへやにも設置し、三教科で連携しカリキュラムの見直しも含めよりよい鑑賞教育を行う予定である。

(4) 「初等学校独自」に関連して

- ・ コロナ禍を経た『『つながり』の在り方』に関して模索中。

- ・ 「つくる」活動の中核にコトづくりを大事にした授業をカリキュラムに取り入れ実践した。

- ・ 命を守る生命教育の一環としてのライフセービングの活動を継続中。

(音楽) 音楽系課外クラブの活動充実に向け取り組んだ。音楽の会、東初協音楽祭、学園音楽祭に参加した。ブラスバンド部は、運動会ファンファーレ演奏(合同体育、秋の運動会)、合唱部は、NHK全国学校音楽コンクール、文化祭オータムコンサート参加した。

D. その他の重点分野

《中期計画の目標》

個性尊重の教育に関わる、学習環境整備。

《中期計画の取組》

①学びサポーターの充実

②成城幼稚園と成城学園初等学校の垣根を下げ、園児への遊び場開放や幼初つながり行事の拡充

《事業計画》

- ・「個性尊重の教育」の研究を深める
- ・事業計画については、次年度以降に検討する。

《事業報告》

- ①橋本教諭を中心に活動した。初等学校卒業生が学びサポーターとして、多数参加してくれた。しかし、常時学びサポーターがいる状況は中々実現できなかった。
- ②成城幼稚園と初等学校との連携については、コミュニケーションの頻度が上がった。今年度から成城幼稚園保護者・園児の初等学校見学について、ある程度ゆとりをもって見学してもらえるよう配慮した。(1学期27日、2学期33日)。

(Ⅱ) 研究活動

《中期計画の目標》

児童の教育活動の充実を図るため、授業研究を通して、教員の授業力の向上を目指し、その成果を発表する。

《中期計画の取組》

- ①外部発表の継続・充実
- ②校内授業研究会の継続・充実
- ③教育改造研究会の継続実施
- ④『文質彬彬』にて研究成果の一部をまとめる

《事業計画》

- (1) デジタル・シティズンシップ教育の充実。ICT教育先進校として、ICT機器やAI等の先進技術を活用した教育実践の研究の充実と発信を図る。
- (2) 合理的配慮を必要とする児童の支援につながる児童理解研修会の実施。
教科ごとの外部講師を招いた授業研究の実施。全教員が年間1回以上の外部研究会への参加及び研究内容の報告。授業力向上を目的とした新人研修の継続実施。教育改造研究会の実施。
- (3) 研究発表の実施
 - ・日本数学教育学会全国大会・新算数研究会（湯河原セミナー）での発表
数学部、「理数好きを育てる探究推進プラン（文部科学省）」研究推進実践校として採択
 - ・造形教育センター、児童造形教育研究会、美術科教育学会での発表
- (4) 前年度の学校活動に関する学校評価実施、報告（公表）すると共に、学校評価を毎年実施する体制を整える。
 - ・学校評価の実施（保護者アンケート、自己点検、評価委員による評価の実施）。
- (5) 特色ある教室配置・施設・設備に見合った教育実践・内容（カリキュラム）の継続と更なる充実に向けた研究の継続。

《事業報告》

- (1) デジタル・シティズンシップ教育の充実について
AIを含む先進技術の実証研究としては、7月経産省「未来の教室」へ参加し、Yui Connectionとの研究をスタートさせた。8月よりスクールタクトのログデータ分析に関する実証実験に参加をした。※DC教育の充実について、前述の通りである。
- (2) 合理的配慮を必要とする児童の支援につながる児童理解研修会の実施について
生活推進部主催の「児童理解の会」を年5回実施した。その際、各クラスから支援が必要な児童を抽出し、全教員で話題にし、今後の支援策などを議論した。アドバイザーとして、学校カウンセラーも参加した。
- (3) 研究発表に関して
 - ・数学部が新算数研究会（湯河原セミナー）で発表した。
数学部が「理数好きを育てる探究推進プラン（文部科学省）」研究推進実践校の成果発表会にて、研究成果を発表し、日本GLOBEより特別賞をいただいた。
 - ・美術部が、造形教育センター、児童造形教育研究会、美術科教育学会で発表した。
- (4) 学校評価を実施する体制の整備について
 - ・アンケート項目の文章表現に関しての吟味を行い、学校評価を実施した。
- (5) 特色ある教室配置・施設・設備に見合った教育実践・内容（カリキュラム）の継続と更なる充

実に向けた研究の継続について

- ・教育改造研究会や各教科部主催の授業研究会にて、継続研究の成果を発表した。

(Ⅲ) 社会連携活動

《中期計画の目標》

奉仕活動・成城学園前駅付近商店との地域連携の強化を模索し、検討する。

《中期計画の取組》

①朝の挨拶運動、地域の清掃活動等

②社会連携の一環として、世田谷ー当時は砧村喜多見と呼ばれたー移転100周年を機に、成城のまち100年記念事業を学園と成城・祖師谷地域とで一緒になって盛り上げることに協力する

《事業計画》

- (1) 朝の挨拶運動、清掃活動について、感染防止対策を講じた実施。
- (2) 成城学園前駅付近商店との地域連携については、社会科「地域の学習」と連動して実施。
- (3) 保護者と協力しての交通安全指導の継続実施。
- (4) 敷地を接する世田谷区立祖師谷小学校との児童・保護者・教職員・校長各レベルでの学校間交流活動の継続・活性化。
- (5) 学校協議会及び学校関係者評価委員会活動を通じての情報共有と学校連携の継続・活性化。
- (6) 音楽でつながる成城・祖師谷地区との連携。

《事業報告》

- (1) 朝の挨拶運動、清掃活動について、感染防止対策を講じた実施について
社会に貢献できる児童の育成を目的に、生活推進部を中心に今後の活動を検討中である。
- (2) 社会科「地域の学習」(成城学園前駅付近商店との地域連携)の実施について
祖師谷のサミットや砧清掃工場と連携して社会の学習を計画・実践した。地域の商店街やボランティアとの連携で様々な方から児童が直接話を聞いたり、インタビュー資料作成にご協力をいただいたりする機会をもった。
- (3) 保護者と協力しての交通安全指導の継続実施について
子どもの登校の見守りを父母の会の協力を得て実施した。
- (4) (5) 祖師谷小学校とは、今年度も、避難訓練の二次避難場所として初等学校グラウンドをお貸しするなどの交流を行った。また、学校協議会及び学校関係者評価委員会活動を通じての情報共有と学校間連携を行った。
- (6) 音楽でつながる成城・祖師谷地区との連携について
(音楽) 成城100年祭記念コンサート「だれだってなかま音楽祭vol. 1」(主催: 成城自治会) 出演依頼があったが、日程調整がつかず参加が叶わなかった。

(Ⅳ) 教育環境整備

《中期計画の目標》

- 1) GIGA スクールとして相応しい環境の整備。
- 2) 小グラウンドの環境整備。
- 3) 第二校舎の環境整備。

《中期計画の取組》

- ①全児童1人1台端末・1人1IDの整備、デジタル教科書の導入
- ②生涯体育に関する研究成果の実現
- ③音楽のへや、社会科のへや、英語のへや(English Room)、美術(絵、彫塑、工芸)のへやの設備充実

《事業計画》

- (1) 児童1人1台iPad計画実行の4年目で、3～6年生児童個人持ちiPadの活用。3年生は新規端末購入を基本に各家庭負担の理解・協力。
- (2) 特色ある教室配置・施設・設備に見合った教育実践・内容(カリキュラム)の継続と更なる充実にに向けた研究の継続。

《事業報告》

- (1) iPadを今年度も滞りなく3年生へ配布し終えた。なお、試験的にペアレントコントロールの利用もスタートした。児童がより安心して使えるよう、保護者が安心して見守れるように日々改善を行っている。ただし、来年度から機種が大幅にリニューアルするため、その対応が下期の検討課題となる。
- (2) 「デジタル・シティズンシップ教育」について 幼稚園～高等学校までの教員の学びの場「幼初中高合同研究会」において、初等学校のDC授業実践を発表した。①国語 6年柚組「話し言葉と書き言葉」大槻 ②数学 3年櫟組「時こくと時間」堀辺 ③音楽 4年桂組「著作権は誰のもの？」安川 ※半数 ④図工 4年桂組「のぞいて見つけて私のTシャツ」橋本 ※半数 ⑤社会 5年葵組「5年情報単元」宮田 ⑥生活 2年柊組「生活科 まちの人にもつたえよう」

成城幼稚園

(I) 教育活動

A. 国際教育

《中期計画の目標》

- 1) 幼稚園独自の語学教育を通じて、外国人に対し物怖じせず、コミュニケーションを図りたいという意欲を育てる。
- 2) 身近な経験を通じて、日本文化と他国の文化の存在を理解させる。

《中期計画の取組》

- ① ネイティブ講師との触れ合いを通じて、英語教育の充実を図る。
- ② 節句、七夕、ひな祭り、節分等、日本の伝統行事を体験させる。
- ③ 大学・高校への各国からの留学生との交流を通し、他国言語・文化を感じる機会を設ける。
- ④ 他国での生活を経験している在園保護者に協力を得ながら、日本以外の国の文化や言語を身近に感じる機会を設ける。

《事業計画》

【語学教育】

- ・ ネイティブ講師も日本人教師と一緒に日々の保育にかかわり、子ども達に生活の中での英語を体験させる。
- ・ 年長・年中は週2回、年少は週1回、ネイティブ講師を中心に、基礎的な英単語やフレーズを身につける英語活動の時間を持つ。
- ・ ネイティブ講師と一緒に、みんなで英語を使いながら学園内散歩をする時間を持ち、幼稚園内の生活だけでなく、身近な英単語を知る機会を増やす。
- ・ 園児と学園他校のネイティブ講師達との交流の機会を少なくとも年2回以上（初等「夏の学校」期間と「スキー学校」期間）設ける。（特に初等学校とは年度初めに年間スケジュールを確認し日程調整を行う。）
- ・ 幼初の英語教育の継続をスムーズにするため、1学期中に幼初の英語活動担当者間で連絡会を持つ。

【国際交流】

- ・ 各国の文化の違いを理解する為の基礎となるよう、日本の伝統行事の体験の機会を多く提供し理解させる。
- ・ 学園他校に協力を求め、学園に来校中の留学生と園児との交流の場を設ける。
- ・ 上記の経験を補完する為、学園他校のネイティブ講師達との交流の場を活用する。
- ・ 世界地図を見て、いろいろな国やその文化を考えさせる機会を設ける（各学期に2～3か国・地域以上）。年長には、自分たちで他の国の文化などについて調べる活動の時間を設ける。
- ・ 上記の活動と連携して、他国での生活を経験している在園保護者等に協力を得ながら、日本以外の国の文化や言語を身近に感じる機会を設ける。

《事業報告》

【語学教育】

「散歩」ということではないが、ネイティブの教員が伊勢原宿泊保育や秋の遠足などに付き添うことができ、「幼稚園内の生活だけでなく」英語を話す機会を設けることができた。幼初の英語担当教員同士の会合は設けることができなかったが、英語一貫教育の委員会の場で情報交換を行うことで、交流をはかった。それ以外の項目は計画通りに実施した。

【国際交流】

学園他校の留学生について、大学生はボランティア（無料）での活動を好まない傾向があるようで、実施には至らなかった。また海外を経験している在園保護者との交流については時間的な問題があり実施できなかった。それ以外の項目は計画通り実施した。

B. 理数系教育

《中期計画の目標》

- 1) 自分の主張を伝え、相手の考えを聴く力を養い、解決策を考える力を身につけた子どもを育成する。
- 2) ICTの楽しさ、便利さを体感させ、同時にデジタルシティズンシップ教育も行い、より良い付き合い方を確立させる。
- 3) 身近な資源の使い方について考えさせる環境教育に取り組む。

《中期計画の取組》

- ① 自分の意見や考えを友達の前で話す機会を作る。
- ② 友達の考えや話を聞いて、自分の考えと異なる友達の考えに気付く体験をさせる。
- ③ 教員は子ども達と一緒に、問題を子ども同士で解決する機会を作る。
- ④ 友達と協力しながら、工夫して大きな製作物を創り上げる。
- ⑤ 子ども達(年長)と、インターネットの楽しさと危険なことの両面を話し合う機会を作り、ICT 機器との付き合い方を考えさせる。
- ⑥ 子ども達がインターネットをより正しく使う使い方を考えるような保護者教育の機会を作る。
- ⑦ 自然観察の中で発見した生き物や草花について、図鑑やICT機器を活用し、教員と一緒に調べる機会を設ける。
- ⑧ 野菜の栽培を行い、食べる楽しさを養うために、収穫を体験させる。
- ⑨ 身近な生活の中で体験できる、子ども達にとって「知らなかった」「不思議だ」と感じられる科学的変化を伴う体験を、経験させる。

《事業計画》

【論理力の育成】

(日々の幼稚園生活の中で以下の活動を常に心がける)

- ・ 自分の意見や考えを友達の前で話す機会を作る。
- ・ 友達の考えや話を聞いて、自分の考えと異なる友達の考えに気付く体験をさせる。
- ・ 教員は子ども達と一緒に、問題を子ども同士で解決する機会を作る。
- ・ 積み木や折り紙等、完成形をイメージして、工夫しながら様々なものを創り上げるようにかかわる。
- ・ 友達と協力しながら、工夫して大きな製作物を創り上げるようにかかわる。
- ・ 仮説を沢山立て、それを験してみる機会を作る。
- ・ 新しい発見や気付いた変化を友達と共有し、一緒に共感できるようにかかわる。

【デジタルシティズンシップ教育】

- ・ 子ども達(年長)とインターネットの楽しさと危険なことの両面を話し合う機会を、一学期中に作りICT機器との付き合い方を考えさせる。
- ・ 子ども達がインターネットをより正しく使う使い方を考えるような保護者教育の機会を一学期中に作る。
- ・ ロボットと触れ合う体験をさせる。
- ・ カメラやタブレット等のICT機器を利用して、植物や昆虫の成長等を継続的に観察する活動を行う。
- ・ 映像メディアを利用し、交通安全や防犯についての知識を得て話し合いにより理解を深める活動を行う。
- ・ 製作で使用する素材や教材を、形や色、数で比較したり分類したりする。

【科学教育・環境教育】

- ・ 自然観察の中で発見した生き物や草花について、図鑑やICT機器を活用し、教員と一緒に調べることを身につけさせる。

- ・野菜の栽培を行い、食べる楽しみを養うために、収穫を一回以上体験させる。
- ・植物の生長を知るために、花の種子や球根を植えること等を一回以上体験させる。
- ・理科の実験授業を体験し、不思議だな、面白いなという原体験をさせる。
- ・身近な生活の中で体験できる、子ども達にとって「知らなかった」「不思議だ」と感じられる科学的変化を伴う体験を、経験させる。
- ・恐竜・化石ギャラリーの見学を通して、過去の時代の生物への関心から想像力を育む。
- ・身近なエコを考えたり、資源の無駄使いをしないような紙芝居などを読む。

《事業報告》

【論理力の育成】 【デジタルシティズンシップ教育】

各項目について計画通り実施した。

【科学教育・環境教育】

中高理科の協力を得て実験授業を計画していたが、何度か日程調整を行ったものの、実施に至らなかった。昨年度までは中高理科教員の研究日に実施していただいていたが、今年度から研究日に出勤していただくと振替休日が必要になり、日時の設定が極めて難しくなった。また、恐竜・化石ギャラリーの見学も実施には至らなかった。それ以外の項目は計画通り実施した。

C. 情操・教養教育

《中期計画の目標》

子ども達の想像力を育て、人の気持ちへの理解を深める。および、芸術に対する感受性を育て、創造力や表現力に対する感性を磨く。

《中期計画の取組》

- ①絵本の読み聞かせ活動や製作活動等により、子ども達が自分でイメージを膨らませたり、教員や友達とイメージを共有し想像力を育てる機会を作る。
- ②音楽や美術を中心に幅広い分野で“本物に触れる機会”を多く与える。

《事業計画》

- ・ 絵本の読み聞かせ活動や製作活動等により、子ども達が自分でイメージを膨らませたり、教員や友達とイメージを共有し想像力を育てる機会・工夫を教員間で検討・共有する時間を学期毎に設ける。
- ・ 音楽や美術を中心に幅広い分野で“本物に触れる機会”を多く与えるために、定期化した行事だけでなく今年度可能な「ふれあいコンサート」や「職業体験」を計画・実行する。
- ・ 想像力・表現力・創造力等の感性を磨くために、ごっこ遊びや劇遊びの表現活動の機会を設ける。
- ・ 園児にとって、より身近な初等学校の児童による「劇の会」「音楽の会」を鑑賞する機会を持てる様、初等学校への依頼・検討を始める。

《事業報告》

初等学校の児童による「劇の会」「音楽の会」の鑑賞については依頼・検討には至らなかった。それ以外の項目は計画通り実行した。

III.

教育研究所の部

法人事務局の部

成城学園教育研究所

(Ⅱ) 研究活動

《中期計画の目標》

【教育研究所50周年記念事業】

2027年の研究所開設50周年にあわせて、特色ある研究機関としての機能の充実を図る。

《中期計画の取組》

- ①デジタルアーカイブ構築・公開(澤柳私家文書、澤柳文庫など貴重な教育資料)
- ②蔵書検索システム立ち上げ(ネット検索を実現し研究者の利用の便に供する)
- ③研究所独自サイトの立ち上げ(上記の成果や歴史記念館情報等の発信)
- ④教育資料に関する調査活動の継続(資料収集、整理他)
- ⑤貴重資料の修復、脱酸化(小林文庫、澤柳文庫等/研究者の利用の便に供する)
- ⑥専門家を招聘した講演会、シンポジウムの開催(学園における教育研究の推進)
- ⑦50周年記念の研究助成の実施(特色ある一貫教育の実現と推進のため)

《事業計画》

- ①掲載資料の選定と資料の内容についての予備的調査の実施。
- ②業者選定に向けた専門業者との打合せの実施。
- ③独自サイト立ち上げに向けた学内での連絡調整の実施。
- ④関係資料に関する情報収集、翻刻作業など。
- ⑤修復に向けた資料の熟覧、資料保全に関する情報収集を実施、一部について予算内で実施。
- ⑥地域の美術館、資料館と連携し、関連企画を実施。
- ⑦通常の研究助成事業の課題の洗い出しを実施し、記念事業としての実施に向けた準備を開始。

《事業報告》

- ①・③事業の前提となる百年史の編纂に注力した。
- ②業者からのヒアリングを含め検討した結果、既存データベースの問題点を洗い出した。
- ④ここまでの作業成果を取りまとめた百年史の編纂に注力した。
- ⑤小林文庫について、専門家の知見を得ながら、目録化をはじめ現状把握に努めた。
- ⑥上半期に実施した講演会への反応をふまえ、2025年度の企画についての検討を進めた。
- ⑦事業開始以降の履歴、現状の問題点の整理を終えた(2025年度定例所員会議で検討)。

(Ⅲ) 社会連携活動

《中期計画の目標》

【砦移転100周年事業】

2024～2025年の地域開発と学校移転の100周年を起点として、成城学園と世田谷区、成城地区との特色ある関係を強化し周知する。

《中期計画の取組》

- ①せたがや文化財団、世田谷区教育委員会、松本市等、地域や関係機関との連携事業を企画、運営、共催
- ②各種講演会等の実施(「成城 学びの森」との連携講座の共催、また「成城」の特色ある歴史や環境をテーマとして自治会・世田谷トラスト等との講演会の共催)
- ③学園関係、地域の演奏家によるコンサート開催(地域住民の鑑賞可)
- ④各校園で周年行事を実施する際の広報活動の支援(2025年度:幼稚園、成城玉川小学校開設100周年、2026年度:旧制高校開設100周年、2027年度:旧制高等女学校開設100周年)

《事業計画》

- ①世田谷美術館(2024年2～4月)、区立郷土資料館(2024年11～25年1月)での企画展と連携し、関連イベントへの協力、企画展示室での関連展示の実施。
- ②「学びの森」事務局との打合せなど、準備作業を実施。
- ③地域の100年にあわせて、地域からの要請に応じて実施を予定。
- ④各校園から企画が示された場合について支援を実施。

《事業報告》

- ①区立郷土資料館企画展「成城の歩み100年」(10～12月)での11月開催の関連イベント(ミニシンポジウムに協力し、12月からの成城ホールでの関連展示(記念展示in成城)にもパネル提供の形で協力をした。
- ②「学びの森」側との調整の結果、澤柳研究の第一人者にオープンカレッジで講義してもらうことを決定した。
- ③成城100年祭実行委員会主催の2025年度のコンサートに協力する方向となった。
- ④2024年度は企画を実施せず。2025年度の企画に向けた各校園、部署との情報交換に努めた。

(Ⅳ) 教育環境整備

《中期計画の目標》

【歴史記念館の利活用の充実】

歴史記念館を自校史教育の基幹的センターであると共に、ステークホルダー(受験生を含む)のためのフロントとして位置づけ、成城学園の特色ある歴史と教育を周知する。

《中期計画の取組》

- ①歴史記念館における生徒、学生などを対象とした授業外の教育機会の定例化(企画展示見学、ギャラリートークなど)
- ②教育の三位一体を充実させるための講演会等の催しの開催(主に保護者対象)
- ③定期的な展示内容の更新と充実を実施
- ④ミュージアム機能の充実と学園内の認知度を高めるため、博物館相当施設登録を目指す
- ⑤ノベルティなどを制作・頒布して認知度を高める
- ⑥澤柳研究(2027年が没後100年)や大正新教育の最新の成果をまとめた「成城教育選書」(仮称)など、刊行物を通じて世間での認知度を高める

《事業計画》

- ①定例化に向けた準備のため各校園より情報収集、ブレインストーミングの実施。
- ②学校説明会、オープンキャンパスにあわせて臨時開館を実施。
- ③従来の作業を継続して実施。
- ④学園資料目録作成を進め、他校、他学の事例を調査検討。
- ⑤企画・頒布を継続実施。
- ⑥シリーズの概要検討と、執筆候補者の選定作業の開始。

《事業報告》

- ①大学のゼミ、WRDや博物館実習、高校の特別授業など10回の特別見学会に対応した。
- ②11月14日に「気づけば伸ばせる学習障害」を開催し、多くの保護者が参加した(『成城教育』204号を参照のこと)。
- ③郷土資料館「成城の歩み100年」への展示品貸出にあわせ、展示の一部入れ替えを実施した。
- ④百年史編纂に合わせ資料目録の作成は進んだが、他校、他学の調査検討は来年度対応となった。
- ⑤既制作分を催し物の際に鋭意配布して、在庫の有効活用に努めた。
- ⑥執筆候補者より内諾を得、内容的な打合せの段階に移行することができた。

法人事務局

(Ⅲ) 社会連携活動

《中期計画の目標》

【広報:認知拡大】

成城学園、成城大学および世田谷区成城の知名度の向上。

《中期計画の取組》

- ①成城学園移転 100 年プロジェクトの実行
- ②「知性・意欲・心」を育む「本物に触れる」機会の拡大(恐竜・化石ギャラリー等)

《事業計画》

成城学園と成城の街の知名度向上を目指し、以下の取り組みを行う。

- ①成城学園が移転 100 周年を迎える 2025 年に向けて、成城学園移転 100 年＝成城の街 100 年を学園内外に周知するための広報活動を行う。
- ②恐竜・化石ギャラリーの見学者を増やすための学外向け広報活動を行い、更なる周知を図る。

《事業報告》

- ①成城学園移転 100 周年に関連した以下の広報活動、関連イベントを実施した。

広報活動

- ・移転 100 周年特設サイト開設
- ・移転 100 周年 PR 動画制作・公開（成城学園 YouTube チャンネル、小田急線車内ビジョン、新宿サザンテラスビジョン、たまがわ花火大会会場ビジョンでの放映等）
- ・ジオターゲティング広告による移転 100 周年広告の配信、特設サイトへの誘導
- ・成城学園前駅 移転 100 周年フラッグ、ポスター掲示及びちらし設置

関連イベント

- ・成城学園歴史記念館特別展示「文化でめぐる成城の 100 年」（6 月 5 日～7 月 6 日）
- ・歴史記念館講演会「成城に住んだ美術家たち」（6 月 29 日）
- ・SEIJO シネマデー（11 月 9 日）
- ・クリスマスマーケット in 成城学園（12 月 14 日）

- ②例年開催する恐竜・化石ギャラリー一般公開では、土曜・日曜に開催した他、関連イベントを企画し、昨年を上回る来館者数を得た。また、近隣の学校及び教育機関に向け広報を強化した結果、他学校からの来館数が増加した。

その他、以下の特別イベントを実施した。

- ・恐竜・化石ギャラリー夏のナイトミュージアム（7 月 18 日）
- ・きょうりゅう写生会（10 月 19 日）

(Ⅳ) 教育環境整備

《中期計画の目標》

【施設:学園施設整備計画】

「知性・意欲・心」を育む学修環境の整備・充実

【施設:キャンパスの憩いの場充実計画】

学園内各所自然環境における維持管理及び緑化推進計画の策定と実行。

《中期計画の取組》

- ①第2次中期計画で策定した中長期修繕計画等に基づく施設整備・建設の実施
- ②計画に則った既存樹木の維持管理や植樹の実施
- ③誰もがキャンパス内で自然環境に触れることのできるエリアを各所に構築

《事業計画》

- ①-1 中長期修繕計画等に基づき、新校舎をコアとした児童・生徒・学生動線及びバリアフリー化や防犯面の整備を見据えたキャンパスを実現すべく、安全かつ学園運営の持続性を担保できるローリング計画を立案し、施設整備・建設を実施していく。
- ①-2 成城学園移転100年にあわせ、正門周辺の整備について、費用面を含めた計画を検討する。
- ①-3 経年により老朽化している大学8号館の空調設備について、大学管理課との連携により、更新工事を実施する。
- ②安全面で懸念される樹木（老木・電線等への支障枝）に対する剪定及び伐採対応。
実生樹木により過度に密集している箇所を確認を行い、既存樹木の育成を考慮した維持管理を行う。
- ③キャンパス内を調査し、他運用に支障が無く有効活用できる場所の調査と、該当箇所に対する費用面を含めた計画を立案する。

《事業報告》

- ①大学新校舎建設に向け既存施設の築年数を踏まえた劣化状況調査を行い大学施設全体の改修（ローリング）計画原案を作成した。また、正門周辺の改修整備に関する調査に加え、大学8号館の空調設備更新を遅滞なく実施した。
- ②樹木整備計画に沿い、各校と調整の上、既存樹木の剪定を進めた。主な剪定場所は中高体育館北側坂面・第2グラウンド東面と南面・成城池周辺・幼稚園園庭内。加えて、杉の森内に立枯樹木が散見されることから、該当樹木の伐採について対応を行った他、以前より立枯れを起こしている成城池北側の樹木を伐採後、植樹を完了した。

(V) その他重点項目

《中期計画の目標》

【広報:成城学園の魅力の再発見】

成城学園らしさを見つめなおし、成城学園のブランドをさらに磨く。

【広報:広報活動のデジタル化】

利便性の向上と資源・環境への配慮を考え、広告媒体のデジタル化促進。

《中期計画の取組》

- ①各校サイトの再構成
- ②広報活動におけるデジタルシフト
- ③コンセプトを統一した広報活動
- ④キャンパス(自然・環境)広報

《事業計画》

成城学園の魅力をより広く伝え、ブランドを向上させるために以下の取り組みを行う。

- ①初等学校ウェブサイトトップページリニューアルに向けて検討する。
- ②成城学園報を段階的にウェブへ移行し、広報活動のデジタル化を図る。
- ③成城学園のグッズやツールのデザインの統一化を図る。
- ④キャンパス内の自然や地形をテーマとした広報活動を行う。

《事業報告》

- ①初等学校のウェブサイトについて、来年度リニューアルに向けた検討を行った。
- ②「成城学園報」掲載の各校ニュースコーナー (News Digest) の記事の一部を紙面に掲載しつつ、ウェブサイトを閲覧いただくよう改変を行った。また、第3次中期計画で学園が掲げる「しなやかな知性、挑戦する意欲、共感する心」を大切にする教育を学内外に周知するため、成城学園 note に「成城学園オープン学園報」をスタートした。
- ③「成城学園校章マニュアル」を改訂した。また、各校名の推奨ロゴを作成した。
- ④成城学園 note にて、成城のまちと自然と成城学園の関わりについて紹介するマガジン「SEIJO natureー成城のまちと自然と学校の話ー」をスタートした。

《中期計画の目標》

【職場環境:新たな創造に挑戦できる職場へ】

教職員の意欲や能力の向上につながる制度。メリハリある給与体系の構築。

働きやすさや心身の健康を考慮した職場環境の構築。

大胆な事務合理化。

《中期計画の取組》

- ①多様な働き方を可能とする制度設計
- ②メンタルヘルスサポートの拡充
- ③能力や業績に基づく評価制度と給与体系の整備
- ④キャリア開発のための研修や教育プログラムの充実
- ⑤業務フローの見直しとデジタル化等によるプロセスの最適化

《事業計画》

- ①教職員の働きやすさやより良い職場環境の整備として、時代のニーズに応じた新しい働き方（アソシエイト事務職員制度や事務職員在宅勤務制度の導入など）の構築に取り組む。

- ②学園で勤務する教職員の心身の健康を維持するために、各職層に応じた適切なハラスメント防止研修を実施し、こころの相談窓口設置の検討を始める。
- ④教職員の意欲や能力向上に向けて、引き続き教員の働き方改革にも取り組み、積極的に各種研修も実施していく。
- (以上、人事課)
- ⑤電子契約書に対応できる規則整備及び業務フローの見直しを行う。(庶務課)

《事業報告》

- ①アソシエイト事務職員制度の運用を開始した。
- ②ハラスメント関連規程の改正をした他、ハラスメント研修を管理職を含めた各方面に向けて実施し、教職員のメンタルサポート施策を行った。
- ④幼稚園、初等学校、中学校高等学校の教育職員の働き方改革に取り組み、規則整備などを行った。また、事務職員には職層別研修を実施し、自身の働き方、キャリア開発に関する施策を行った。
- ⑤電子契約書の規則整備については、官公庁などの類似規則を収集したものの、私学法改正に伴う内部統制システム関連の規則整備との関係から、規則策定には至らなかった。

《中期計画の目標》

【Digitization と Digitalization】

各種ソリューション活用により、各校の校務事務を効率化し、コスト及びタイムパフォーマンスを向上させる。

《中期計画の取組》

- ①AI が組み込まれたソフトウェア等の活用
- ②各種デバイス及び IOT を身近にした業務の省人省力化
- ③仕事の場所や方法に柔軟性を持たせ、各人の能力が引き出せる環境の用意

《事業計画》

- ③ ①②に掲げた省人省力化に向けた施策を実現するため、先行して情報システム関連職員の業務環境の改善を図る。具体的には、学園各校及び校外施設等で行っている情報システム関連の校務サポートに関し、人の移動を介さず遠隔でサポート可能となる仕組みを検討する。
- また、業務の効率化・省力化を目的として、電子契約書や電子帳簿保存法に対応できる規則整備や業務フローの見直し、システム導入等を実施する。

《事業報告》

情報システム関連職員の校務サポートにおいて、ウェアラブルカメラを利用したリモート対応を日々の業務に取り入れることにより、情報共有及び時間短縮を図り業務効率化（工数削減等）に繋がった。

《中期計画の目標》

【ガバナンス: 構造の見直しと強化】

改正私立学校法が求める「運営基盤の強化」「透明性の確保」の実践と定着。

《中期計画の取組》

- ①改正私立学校法を含む法令に準拠した適切な規則整備

《事業計画》

- ①改正私立学校法（令和7年4月施行）に準拠した寄附行為の改正及び寄附行為認可申請を行う（令和6年10月以降）とともに、寄附行為施行規則をはじめとする関連規則を整備する。

《事業報告》

令和7年4月1日施行の改正私立学校法に対応する寄附行為については、令和6年10月初旬に文部科学省に申請し、令和7年2月17日付認可通知を受領。また、寄附行為施行規則を始めとした学園諸規則の改正に加えて、内部統制システム整備の基本方針を策定し、理事選任機関に関する規則等、新たに関連諸規則を制定した。

《中期計画の目標》

【会計:新会計基準への対応】

新会計基準に対応した決算業務への移行と確立。

《中期計画の取組》

- ①新会計基準に対応する規則整備
- ②現行の決算業務の見直しと必要に応じた基幹システムの変更

《事業計画》

- ①改正私立学校法において、学校法人会計基準を、私立学校振興助成法に基づく基準から、私立学校法に基づく基準に位置づけ直すこととなっている（＝新会計基準）ことを踏まえ、
- ア. 新会計基準、私学法改正に伴う現行の学園規則、および業務フローの要変更点の洗い出す。
 - イ. 新会計基準、改正私立学校法下における監査法人との連携について確認する。
（＝監査法人とのすり合わせ）。
 - ウ. 「財産目録」の内容等見直し
改正私立学校法で新たに監査法人の監査対象となる「財産目録」について、（監査法人と協議の上）内容の見直しを実施するとともに、基幹システムを使った新様式等を検討する。

《事業報告》

- ①ア. 令和6年9月30日公布の「学校法人会計基準の一部を改正する省令（令和6年文部科学省令第28号）」、及び令和7年3月27日公布の「学校法人会計基準の一部改正に伴う計算書類の作成等について（通知）」により、新会計基準の具体的な変更点が明確となったが、公布が年度末となったため本年度は詳細確認のみの対応にとどまった。
- イ. 監査法人との間で、改正私立学校法、新会計基準について変更点等を確認した。前記同様、公布が年度末であったことから、具体的な会計処理方法等については、令和7年度期中監査において打合せ予定。
- ウ. 新会計基準に基づき令和7年度決算時に監査法人の監査対象となる「財産目録（施行前である令和6年度は監査対象外）」の様式案を新たに作成した。

《中期計画の目標》

【会計:支払業務DX】

DXとキャッシュレス化。

《中期計画の取組》

- ①インボイス制度、電子帳簿保存法を踏まえたペーパーレス化の実現

②キャッシュレスサービスの調査他、導入に向けた準備

《事業計画》

- ①2025 年 4 月より完全対応の必要があるインボイス制度、および将来対応が必要となる電子帳簿保存法を踏まえ、学園内各校・部署における会計関係業務（支払依頼伝票起票等）について、システム導入等によりペーパーレス化を推進する。
- ②学園内における現金の取扱いについて、現金事故防止および現金管理業務の効率化の観点から、キャッシュレス化を推進する。
 - ア．手数料等を徴収している既存サービス（教務部・学長室・募金室・管財課・会計課等）を整理する。
 - イ．キャッシュレス関連各種サービスの情報収集、および今後一般的となるサービス等方向性を見極め、具体的に導入サービスを検討する。

《事業報告》

- ①インボイス制度及び電子帳簿保存法を踏まえ、取引業者からの請求書について、クラウドでの受取サービスを導入しペーパーレス化が完了した。これに伴い、学内処理（支払依頼伝票）についても、学園内すべての部署においてワークフローの稼働に至った。
- ②ア．現金にて徴収している各種サービスの利用料、手数料等について、銀行振込、電子決済を導入することで全体の約 4 割のキャッシュレス化を実現した。
 - イ．汎用性のあるサービス選定のため、キャッシュレスサービスの動向を調査、情報収集を行った。

《中期計画の目標》

【財務計画】

学園経営に必要な財務構造の確立とそれを踏まえた支出計画の構築。

《中期計画の取組》

- ①中期財務計画等、複数年に亘る計画に関する改訂ルール化
- ②財務に関する各種ポートフォリオの見直しと確立

《事業計画》

- ①第 3 次中期計画に対応した財務計画を策定する。（中期財務計画 2030 の改定 2024 年 9 月）
- ②中期財務計画を踏まえ、財務に関する本学における財務基準等ルール（校納金値上げに関する基準、資産運用規則等）を策定すべく、過年度決算の分析を進める。

《事業報告》

- ①第 3 次中期計画にある大学 10 号館等建設計画を踏まえた財務計画「中期財務計画 2030（令和 6 年度版）」を策定し、9 月開催の理事会、評議員会にて承認を得た。併せて、当該中期財務計画に基づいた令和 7 年度の予算編成を行った。
- ②他学園の計算書類を収集するとともに、過年度からの決算推移を分析した。